

裏 回 九

佐藤愛子



裏 回 九

佐藤愛子



文藝春秋

九回裏

昭和四十六年八月二〇日 第一刷

定価 五四〇円

著者 佐藤愛子

発行者 桼原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷 図書印刷
製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

〈九回裏〉 目次

九回裏……………五

プップ島……………六一

三〇万一千円……………八三

老眼鏡……………一一五

茶の湯とは……………一五三

重たい春……………一八一

三つの心……………二三一

裝幀
風間完

九回裏

九回裏

立彦は年代ものの黒いトランクに下着を詰め、

「じゃあ……」

といって玄関を出て行った。それは秋の終りの、気持よく晴れ上った、冷たい朝のことである。
「またね」

と史はいった。立彦は家を出て行ったのだから、考えてみれば「またね」という挨拶はへんだった。「行っっていらっしやい」というのも尚更なまじおかしいし、かといって「さよなら」という挨拶も史にはふさわしくないように思えた。実際、史には夫婦別れの実感というものはなかったのだ。

事業に失敗した男が、一旗上げてくるといって家を出て行く——事態としては最もそれに近い事態だったが、それにしても立彦の表情には少しも深刻なところがなく、これから余暇を利用して小旅行に出かけようとしている男のような、いそいそとした感じがあった。

といつても、実際に立彦はいそいそと出て行ったわけではないだろう。経営者としてのこの何年かの苦勞の中で、事態が悪化すればするほど空元氣を出してにこにこいそいそすることが身についた。そうして史は史で、どんな悲痛な現実の中でも平氣な顔をする女になった。立彦は玄関から門へ行く敷石道を歩き、門を出て最後に史を見て、

「じゃあ」

ともう一度同じことをいって肯いた。

「グッド・バイ」

と史はいった。「グバァイ」でもなければ「バイバイ」でもなく、「バァイ」でもない。この場合はどうしても「グッド・バイ」でなければならぬ。その史の感覚は立彦にだけわかる。史は門扉を閉めた。

秋が去り冬が来た。新しい年が来て、やがて一月も終ろうとしていた。

「パパ、どうしたんだろう、来ないね」

と小学生の珠子がいった。珠子は地震に馴れた子供のようにこの一家の激動には馴れていた。「そのうち、来るよ」

史がそういうと、

「そうだね」

といった。

夫がいなくなる前もいなくなつてからも、史の生活は何ひとつ変らなかつた。史は遠く去つた親友のことを思うように立彦のことを思つた。ときどきは火柱のような怒りに貫かれることもあつたが、しかしその怒りは休火山の噴火のように時が来ると鎮まつた。史はそれを持続させておくことが出来なかつたといつていい。それほど史は仕事に追われていた。史は子供の珠子と七十六歳になる母と、高給を取る家政婦と秘書との女ばかり五人の生活を支えなければならなかつた。

ある日、史は週刊誌のルポライターとして連れ込みホテルの探訪に出かけることになつた。探訪は夕方の六時からで、その前に史はテレビ局で毎週担当している身の上相談の回答者としての出演があつた。今夜の帰宅は多分十二時近くなる、と史がいうと、母の妙は不機嫌になつて、

「もういい加減に作家らしゅうせにやあ……」

といった。それは史が家を空けるたびに妙がいう言葉だつた。

「作家らしく、私だつてしたいわよ！」

そのたびに史は喧嘩腰になつて叫んだ。

「そういうんなら作家らしくさせてちょうだい！ 作家らしく出来るようにしてちょうだい！」

史は玄関の扉を力まかせに閉め、表へ出てから、

「それでもおふくろか！」

と毒づいた。

「助けようとはせずに文句いうことしかない！」

そんなとき、史はダンプカーの運転手になって、行手のものをことごとく撥ね飛ばして突っ走りたと思う。

「みんな、自分のことばかりだ！」

史は道端に立ってタクシーを探しながら、ぶつぶつと毒づく。

「いったい、誰のために、作家らしくなくなっているのか、考えたことがあるのか！」

史が毒づくのは、早く怒りを燃焼させてしまわねばならぬからだだった。仕事にとりかかる前に、燃え尽してしまわねばならぬ。そのため史は道端で寝そべっているクリーニング屋の犬を蹴飛ばした。

史はテレビ局へ行き、身の上相談に出演した。相談者は二十八歳の人妻で、夫の性器が矮小で性的満足が不十分であるために離婚したい、といった。

「小さいっていうけど、ほかの人のとくらべてみたことがあるんですか？」

と史は聞いた。見学の主婦たちから失笑が洩れている。

「小さいって、どれくらい？」

「子供のより少し大きい程度です」

相手はいった。

「男の人の親指くらい……」

「はあ、そうですか。男の親指ねえ……」

史は投げやりにいった。

「あなたのご主人はほかにいいところないんですか？」

「ええ、ないんです」

女はいった。

「テクニクも下手ですし……せめて、あのう……私を可哀想だと思って……自分を悪いと思つて……何とか……テクニクでも研究してくれればいいんですけれど……そんな気持もないんです」

「私の聞いているのはセックスのことじゃなくて、人間的にですよ、ご主人にいい所があるのかなのか……」

「ありません」

女ははっきりいった。

「あなた、ずいぶん簡単におっしゃるけど、今のあなたはセックスのことばかりで頭がいっぱいになっていて、人間としてのご主人のいい所に気がつかないんじゃないやありませんか」

「さあ……」

女は首をかしげた。

「ないと思いますけど……」

「そう、そんなら別れなさいよ。別れた方がいいでしょう」

史は思わず声を荒らげた。

「あなたの頭はベニスの大小でいっぱいになってる。そんな奥さんと一緒にいても、旦那さんの方も不幸ですよ」

見学の主婦達がざわめいていた。史は呆然としてカメラの助手が「終り」のキューを出すのを眺めた。史は後悔していた。その日の回答をではない。身の上相談の回答者となったことをである。しかしそれは殆ど毎週のことだった。

史は疲労して家へ帰って来た。六時の探訪に出かける前に、二時間ほど時間が空いていた。その二時間はあるP R誌の編集者と食事をする約束になっていた。そこで史は食事をしながら「この頃腹の立つこと、嬉しいこと」という題で原稿代りの簡単な話をする約束をしていたのだ。史はテレビ局の人に頼んで急病になったという断りをしてもらった。

史が家へ帰って来ると、秘書はもう夕飯をすませて部屋へ入っていた。秘書は史の家に寝起きしているが、五時以後は電話が鳴っても絶対に出ない。家政婦は秘書を目の仇にしていた。秘書は自分の食べた茶碗も洗わないし、家政婦が廻している洗濯機の中へいきなり黙って自分の洗濯物を投げ入れるのだ。家政婦は史の帰りがどんなに遅くても起きて待っていて、その日の秘書の

横着ぶりを告げ口する。そんな時、史は会社から帰って来た男が、昼間の出来ごとを逐一、妻から聞かされる苦痛が本当によくわかった。家政婦は史の入った炬燵の脇に坐り、炬燵の上に秘書が載せておいた郵便物の封筒を小鋏で切つて史の前に並べながらいった。

「郵便物の封くらい、切つておいたらどうなんでしょうねえ……」

史は家政婦が切つた最初の手紙を取り上げた。白い分の厚い角封である。史はそれを裏返した。そうしてそこに、グランドホテル藤堂研という署名を見た。

「お元氣でご活躍、かげながら喜んでおります。私の方は既にキャンプに入つて、連日、選手達を調教していますが、私にもまだ昔の競走馬の性能が幾分か残っているのか、つい選手達につられて走つたり投げたりで、身体の方はガタガタになって来ました。私ももう五十歳になります。

夜は割合い暇で、部屋でぼんやりしていることが多く、本を読んだり空想をしたり、昨夜は貴女の『落日』と『戦場の雪』を読みました。しかしこの二つの作品は、貴女の生活が出てくるので、読んでいて時々悲しくなります……」

そこまで一気に読んで来た史は、その一枚目の最後にもう一度目を走らせた。

「しかしこの二つの作品は、貴女の生活が出てくるので、読んでいて時々悲しくなります……」

その言葉は史には唐突な言葉に思われた。史は藤堂研と話をしたことは一度もない。手紙のやりとりをしたこともない。三十年前史は十五歳の少女で藤堂研は十八歳の少年だった。藤堂は十八歳で既に身長が六尺近くあり、その地方で知られた中学野球のピッチャーだった。その投球フ

ホームはレビューの女の子のように高々と片脚を上げるので有名だった。ある日、史は親友の小野俊子と二人で彼のチームの試合を見た。それは夏休みに入って間もなくのことだったが、所ないままに二人は通りすがりに野球場に入ってしまったのである。

史は野球のルールなどよく知らなかった。俊子も史と同じようなものだった。その試合は八月になると開かれる全国中等学校野球大会のための県下の予選試合だった。藤堂のチームの敵方の応援団が藤堂の投球フォームに向って野次を飛ばした。

「そないに脚上げると股が裂けるぞオ」

それで史は藤堂に「裂股」という名をつけた。

「裂股、見に行こ」

と史はその次にまた俊子を誘った。夏休みは史にはどうしていいかわからぬほど退屈な日々だった。神戸と大阪の間、海と山に挟まれたその地方は、気候は穏やかで人の生活も豊かだった。俊子の家はその地方で名のある造酒屋で史の父は大衆小説の作家だった。

「裂股」を見てくると史はそのフォームの真似をして庭先の犬の胴中に向ってボールを投げ、

「これがホントのワンストライク！」

「何です、そんなカッコして。中が丸見えやがな」と妙が叱った。

「……その頃私は、甲東中学の藤堂ピッチャーにネツを上げていた。私は教室の黒板に相合傘を書き、そこに、ふみ、けん、と書いた。誰も書いてくれないので、仕方なく自分で書いたのである。ある日、廊下を通りかかった教頭がそれを見つけて、つかつかと教室へ入って来ていった。

『こんな落書きをしたのは誰だ!!』

クラスの者が黙っているの、教頭は更にいった。

『ふみというのは、小山田のことか。こんなことを書かれた小山田の身になってみよ』

私は途方に暮れてうなだれた。後ろの方で忍び笑いが聞えた。

『書いた者は出て来て拭きなさい。そして小山田に謝れ!』

私はその瞬間、大地震が来て学校が壊滅することを神に祈った。しかし地震は起らず、教頭は声を励ましていった。

『なぜ出て来ん! なぜ隠す!』

仕方なく私は出て行った。机と机との間を歩いて黒板の方へ行くと、私は「雲を踏むような」という表現はまさにこれだ、と思った。私は黒板拭きを手にして落書きを消した。私は教頭の顔を見ることが出来なかった。それは怖れというよりは、教頭に対する申しわけなさ、いや、気の